論 文 ──シンポジウム「移民への錯綜する眼差し──排除と寛容のはざまで」

イースト・エンドとイースト・サイド ---- ユダヤ移民の世界

堀 邦維

はじめに

「イースト・エンド」と「イースト・サイド」、よく似た響きをもつこれら 二つの固有名詞は、片やロンドン、片やニューヨークの最も貧しい地区の 呼称である。その住民のほとんどは、19世紀末にロシア・東欧から流出し たユダヤ移民たちであった。外部の人間からすれば、貧しくて汚いだけで なく、聴きなれない言語(主にイディッシュ語)、異質な習俗など、異様な 雰囲気を漂わす異次元空間であった。英米両国の代表的なユダヤ貧民街と なったイースト・エンドとイースト・サイドはいずれも「ユダヤ・ゲットー」 としてその名を知られるようになる。

ユダヤ人の英米への移民の背景としては、後述するように複数の要素が考えられる。直接的な動因と一般的に考えられるのは、19世紀末にロシア帝国内で起こった「ポグロム」(ユダヤ人迫害)である。ポグロムにはいくつかの波があるが、きっかけを作ったのは1881年の皇帝アレクサンドル2世の暗殺で、ユダヤ人の女がそれに関係していたためだと言われれる。集団的暴力、略奪、焼き打ち、強姦などが猖獗を極め、数万のユダヤ人が命を落とした。」生命の危険を感じた多くのユダヤ人はイギリスとアメリカを目指した。他の西欧諸国に比べて英米両国がユダヤ人に対し比較的寛容であると思われたからだ。ハンブルグからの3日間の船旅でロンドンのタワーブリッジのたもとに到着し、さらに10日かけて大西洋を渡るとニューヨークのエリス島にたどり着いた(エリス島にはアメリカの移民審査局が置いてあった)。

ロンドンに降り立った移民は、そのままロンドンに定住する者もいたが、引き続きアメリカを目指す者も多かった。持ち金に余裕のある者はそのままアメリカへ向かったが、資金が十分でない者は、更なる渡航費を稼ぐためロンドンに一時的に滞在することになる。中には、イギリス政府ないしはユダヤ系イギリス人の組織の資金援助を受けて渡米する者も少なからずいた。実は後述するように、移民のアメリカ渡航を積極的に援助したイギリス政府と既成ユダヤ人社会は両者とも、できるだけ多くの移民をアメリカに送りたかったのである。アメリカを目指した移民の方でも、急激に発展しつつある広大な国土と、大きなユダヤ人コミュニティを持つアメリカに、より大きな魅力を感じていたのも事実である。

ちなみに、ヴィクトリア朝最盛期のイギリスのユダヤ人口は、約60,000人(1877)。これが、ロシア帝国内のポグロムが激しくなる1881年以降になると、1905年の統計で227,000人と約3倍増、うちロンドン在住が150,000人、そのうち100,000人がイースト・エンドに住んだ。ユダヤ人口のこの地区への集中度がわかる。2ニューヨークの場合もほぼ同様の傾向を示しているが、規模がはるかに大きい。イースト・サイド(正式には「ロウアー・イースト・サイド」)には同じ時期300,000人のユダヤ人が暮らしており、ニューヨーク市全体では600,000人であった。3

このような差が生じたのは、もともとアメリカを目指したユダヤ移民の数が多かったのに加えて、イギリスで外国人法 (Aliens Act) が 1905 年に施行されてユダヤ人の流入が激減した後も、1924 年にアメリカで移民法 (Immigration Act of 1924) が施行されるまでの約 20 年のあいだ、ユダヤ移民がアメリカに流入し続けていたからである。1900 年から 1924 年にかけてアメリカに渡ったユダヤ移民の数は 1,700,000 人に上った。外国人法施行以降、アメリカを直接目指したユダヤ人がいかに多かったがわかる。1905年のイギリスの外国人法と 1924年のアメリカの移民法の時間的ずれが、アメリカへのユダヤ移民の流れを一層促進したのである。加えて、ロシア帝国内のポグロムが 1900 年代に入ってさらに激しくなったことも関係していると思われる。

1 状況の変遷

さてここで、過去にさかのぼってイギリス国内のユダヤ人の状況がどのように変遷してきたかを年代順に簡単に振り返っておきたい。

- **1070年**: ウィリアム1世が、征服した王国の繁栄を図るため、商業のノウハウに長けるユダヤ人を連れてくる。
- 1290年:エドワード1世がユダヤ人を国外追放。ユダヤ人の追放は、同じころフランス、ドイツ、スペインでも起こり、セファーディム系つまりスペイン、ポルトガル、北アフリカから西ヨーロッパに移り住んでいたユダヤ人の多くが、ポーランドやロシアに逃れて行くことになる。このユダヤ人たちは後にアシュケナージ系と呼ばれるようになるが、19世紀にロシア帝国で迫害を受けるのはこのアシュケナージ系ユダヤ人の子孫である。
- **1656年**: クロムウェルが、重商主義政策の一環としてユダヤ人追放を解除。 以後、ユダヤ人口が徐々に増え始める。
- **1698年**:ウィリアム3世治下、ユダヤ教の礼拝が議会によって公認される。 だが、このころのユダヤ人は地所など不動産の所有権はなく、借地に ついても拘束を受け、また商業上の差別待遇も受けていた。

18世紀に入ると、イギリスの産業化の進展にともないユダヤ人の数が急増する。しかし、外国籍のままのユダヤ人はまだ土地や船の所有を禁じられ、商業上の制限もあった。帰化するには改宗する必要があった。⁴

1753年5月:「ユダヤ人帰化法案」Jewish Naturalisation Bill (Jew Bill) が議会を通過。これは、イギリスまたはアイルランドに3年間居住した外国籍のユダヤ人が、国教会に改宗することなく、個別的に議会に帰化の請願を行うことが出来るというものであった。しかしその法案通過の直後、新聞と民衆レベルでの反ユダヤ主義のキャンペーンが起こり、イギリス国内が騒然となる。このとき、ユダヤ人はセントポール大聖堂をシナゴーグ変えるらしい、キリスト教徒に割礼を施そうとしているらしい、などというまことしやかなデマまで飛び交い、デモのプラ

カードには「シャイロックとユダヤ人全部に反対」というのもあった。⁵ この騒ぎは当時の民衆のユダヤ人像と、ユダヤ人に対する偏見の一端を表している。結局この法律は、翌年撤回されることとなる。

実際にユダヤ人の平等化が進むのは19世紀に入ってからで、1830 年から1871年にかけてユダヤ人に課せられた様々な制限が徐々に取り除かれていく。順を追って見ると、

1830年:ユダヤ人がロンドンのシティ内で自由に商売をする権利を獲得。

1833年:初めてユダヤ人の法廷弁護士と州長官が生まれる。

- 1858年:「ユダヤ人救済法 Jews Relief Act」が議会を通過する。この法律によってユダヤ人は、キリスト教徒に改宗しなくても、議員になることができるようになる。これをもって法的な意味での完全な平等化がなされ、ユダヤ人解放 (Emancipation) はほぼ達成されたといえる。フランスよりも約70年、ドイツよりも約50年遅い解放であった。そして同年に初めてのユダヤ人の下院議員ライオネル・ド・ロスチャイルドが誕生する。
- 1871年: オックスフォード、ケンブリッジその他の主要大学におけるユダヤ人に対する制限(キリスト教徒である必要性)が完全に解除され、イギリス社会におけるユダヤ人解放はほぼ完了した。
- 1874年:ベンジャミン・ディズレーリが、イギリス首相に就任。彼の場合は13歳の時にユダヤ教から国教会に改宗していたので、ここに至る過程で宗教的障害はなかった。しかしユダヤ人であることをあげつらう政敵もおり、ディズレーリはそれに屈することなく、ユダヤ人としての誇りを公然と表明し、「ユダヤ人救済法」の成立にはユダヤ人政治家として尽力した。
- 1885年:ナサニエル・ロスチャイルド(ライオネルの長男でケンブリッジ 大卒)がイギリスではユダヤ人として初めて「男爵」に叙せられて貴族 院入りする。

以上、イギリス国内におけるユダヤ人のおかれた状況の変遷を、ノルマン・コンクエストからヴィクトリア朝まで簡単に見てきた。このようにユダヤ人の地位が次第に向上していこうとする最中に、ロシア・東欧から大

量のユダヤ移民が押し寄せて来たのである。前にも触れたように、この移民の流入はロシア帝国内におけるユダヤ人迫害すなわちポグロムが最大の要因であったというのが、近年までの定説であった。しかし最近の研究では、ポグロムという物理的圧迫だけでなく、ロシア皇帝アレクサンドル3世(暗殺されたアレクサンドル2世の後継)の政治的な圧力と社会状況の変化があったと言われる。

具体的にはユダヤ人の住居、経済活動の制限などこれまでにはなかったほどの反ユダヤ的な施策の数々のほか、ペイルと呼ばれるユダヤ人居住区内のユダヤ人口の増大による困窮化、産業革命の進展による職の制限、つまり生産手段の機械化の進展で、ユダヤ人の得意な熟練技術の無用化といった社会的背景があったとされる。さらに、セルマ・ベロル (Selma Berrol)によると、1863年の農奴解放が土地に縛られていたロシア人農夫を工場労働者として都市部に流出させ、そのような労働市場でもユダヤ人は劣勢を強いられた。なぜなら都市部ではユダヤ人は居住制限されていたからである。

移民の流出は、このような経済的困難にポグロムが追い打ちをかけた結果であるという見方が現在では有力である。彼らは、経済的に追い詰められ、泣く泣く有り金をはたいて北海そして大西洋を渡っていったのである。ロシア帝国政府は、ユダヤ人問題の解決策として3つの目標を掲げていた――ユダヤ人口の3分の1は死滅、3分の1は国外へ移民、3分の1はキリスト教に改宗。結果的にはこのうち一つの目標は達成されたことになる。ロシア帝国内から流出したユダヤ人の多くは、まずは陸路でハンブルグへ行き、そこから3日かけて北海を渡り、イギリスに到着した。港に降り立った時は、彼らの多くはほぼ無一文で行く当てもなく、イギリス国内の大都市の片隅、なかでもロンドン・イースト・エンドに身を寄せ合い、貧窮にあえぐことになる。

2 貧富の較差

ロシア・東欧ユダヤ人 (アシュケナジウム系) が流入する前に、前章で見たようにイギリスには17世紀ごろから、小規模ではあるがユダヤ人社会

が存在し、19世紀に入るとユダヤ人の社会的・経済的地位は向上し始めていた。19世紀後半には、富豪ロスチャイルド家、首相に2度も就任したディズレーリなどの固有名詞を挙げるだけでも、ユダヤ人が急速にイギリス社会に進出していることがわかる。彼らのほとんどはセファーディム系ユダヤ人である。

これらのユダヤ人たちは富裕ユダヤ人社会を形成し、ロンドンのウエスト・エンドに居を構えていた。しかし19世紀末に貧しい移民が大量に流入してきた結果、ロンドンにはきわめて対照的な2種類のユダヤ人のタイプが存在することとなった。富裕なウエスト・エンドのユダヤ人と貧窮するイースト・エンドのユダヤ人である(無論、いずれにも属さない中間層のユダヤ人、すなわち小規模ながら様々な商工業を営む者も、ユダヤ人コミュニティのなかに多く存在していた)。

イギリス生まれのユダヤ人作家イズラエル・ザングウィルは、ユダヤ人 社会内部における貧富の較差の状況を自身の出世作『ゲットーの子供たち』 Children of the Ghetto (1892) の中で見事に活写している。

半神(半ば神と呼ばれる者)たちが十分な数集まると、会長は会衆に向かって、だらだらと長い演説を行った。そして列席している牧師たちや他の慈善家たちに、この慈善活動は聖書にも、コーランにも、またリグヴェーダの教えにもかなう善行であるなどとのたまい、自分の行っている事業を正当化するのに懸命になるのである。彼の演説が始まると間もなく、家畜小屋と台所を分けている引き戸は閉められなければならなかった。なぜなら押し合いへし合いの人だかりががやがや騒ぎ、しつけの悪い子供たちが大声でわめくからだ。それはまるで会長のありがたい道徳論など聞きたがる手合いは一人もいないという具合であった。彼らはガラクタの集まりで、空腹を満たすことしか頭になく、演説が終わるとさらに大声でわめき始める。この時にはもう仕切りを超えてあふれ出し、狂ったように右往左往するのだ。そしてエスターは自分の両肘をぴったりと体につけて腕が脱臼しないようにしなければならなかった。家畜小屋のドアの外では順番を待つ子供たちが腹をすかして中の様子をうかがっている。(下線、筆者)7

この場面は、富裕なユダヤ人慈善家がホワイトチャペルのユダヤ貧民たちに施しをしている様子を描いたもので、ザングウィルは貧しい子供たち

への共感と富裕ユダヤ人に対する皮肉を込めて描いている。引用中に出てきた唯一の固有名詞がこの小説のヒロイン、少女エスターである(引用下線部)。作品全体に貧窮生活のディテールがリアルに描きこまれているが、ザングウィルは自分の幼少時代をこの主人公に投影している。

この場面からどのようなことが窺えるだろうか。まずは、施しをするユダヤ人と、施しを受けるユダヤ人の対照である。引用冒頭に登場する「会長」(President)だが、これはウエスト・エンドの富裕ユダヤ人が組織した慈善団体のリーダーという設定である。当時はこのようなユダヤ系の慈善団体がいくつもあった。その代表的なものがJewish Board of Guardiansで、その支援者にはロスチャイルド家をはじめ著名なユダヤ人が名を連ねている。すなわちイギリス社会への参入を終えたウエスト・エンドの富裕ユダヤ人たちである。8

施しをする彼らは引用文冒頭にあるように「半神」(semi-divinities)と呼ばれている。無論、作者は決して彼らに敬意を表しているわけではないし、また作中のゲットーの住民たちも、彼らを尊いと思っているわけではない。エスターの父モーゼスは、金持ちは貧乏人に施しをするのは義務であり、施しを受ける自分のことを「金持ちが天国に行くために登るヤコブの梯子(the Jacob's ladder)」であると認識している。⁹ ザングウィルはこの作品に「ある奇妙な人々の研究」*A Study of a Peculiar People* という副題を付けているが、まさしくこの作品はイースト・エンドのユダヤ人たちの生活のありようを克明に記録した一つのエスノグラフィーとして読むことができる。

では、ゲットーで暮らすエスターのようなユダヤ貧民の子供たちとその家族は、実際にどのような環境にいたのだろうか。ゲットーの暮らしぶりに関しては様々な記録が残されている。その一つ一つをここで取り上げることはしないが、オルダス・ハクスリーがホワイトチャペルのいくつかのフラットを視察した際に述べた言葉は印象深い――「もしどうしてもイースト・エンドの生活か、いわゆる野蛮人の生活かのどちらかを選択しなければならないとしたら、まちがいなく野蛮人の生活を選択するだろう」。10イースト・エンドのユダヤ人の生活がいかに酷かったかを窺わせる。

他方、富裕ユダヤ人たちはというと、必ずしも同胞愛や慈悲心から施し を行っていたわけではない。そのことは、ザングウィルの皮肉を込めた表

現の中にすでに窺える。彼らが「自分の行っている事業を正当化するのに懸命になる」(引用文中4行目)のは、裏の目的があるからである。この小説は1892年の出版であるが、実際には1880年代の様子を描いていると考えてよい。この時期にはディズレーリに続くようにナサニエル・ロスチャイルドをはじめとするユダヤ系議員が次々と誕生していく。¹¹ 政治的野心の強い地域のリーダーたちは、慈善事業を集票活動の手段として利用する傾向があった。つまり自分が主催する貧民救済活動への寄付者を募り、それに応えた面々を組織票につなげるという戦略である。さらには1867年の第2回選挙法改正によって、投票権が都市労働者へ拡大したという事情も関係している。

ヴィクトリア朝期には無計画な貧民救済事業は却って貧民たちの自立を妨げるという反省の機運があったが、彼らはそれを無視し、自分たちに都合のいいように慈善活動を得票につなげようと画策していたのである。¹² ジャーナリストでもあったザングウィルはそのような事情には精通していた。だからこそ引用文の通り、富裕ユダヤ人とゲットーのユダヤ人の対照を戯画的に描き出すことができた。そこに富裕ユダヤ人に対する風刺が込められているのは明らかである。¹³

3 労働

一方、ニューヨークのイースト・サイド(正式にはロウアー・イースト・サイド)の方はどうだったのだろうか。ロシア・東欧系ユダヤ人が流入(アメリカ史では19世紀末から20世紀初頭にかけて大量流入した移民たちを「新移民」と呼ぶ)する以前に、イギリスと同様、アメリカにもユダヤ人コミュニティが存在した。

最も古くは1654年にニューヨークに渡ってきた23人のセファーディム系ユダヤ人であった(ブラジルから追放された者たちで、ニューヨークのユダヤ社会の"founding fathers"と呼ばれる)。彼らは大きな勢力にならないまま、19世紀中ごろに渡ってきたドイツ系ユダヤ人の中に吸収されていく。

このドイツ系ユダヤ人は、1840年にはニューヨークだけで10,000人を超

えていた。その多くはドイツ南部、特にバイエルン地方、あるいは当時拡大していたドイツ領の辺境地域の出身である。彼らはドイツ国内で反ユダヤ主義的な圧力に伴う様々な法的制限のために不自由で貧しい生活を強いられていた。そのような状況下で結婚も生活の目途も立たない次男、三男が独身のままアメリカでの新生活と成功を夢見て大西洋を越えて行ったのである。ユダヤ人の系統で言えば、彼らも後に渡ってくるロシア・東欧ユダヤ人と同じく、アシュケナジウム系である。

ニューヨークで最初は行商を生業とする者が多かったが、その中から少しずつ富を蓄積して事業を拡大させていき、ある程度成功した者は、マンハッタンの南のイースト・サイドを離れて、北のアップタウンに移動するか、あるいはニューヨーク以外の東海岸や中西部の諸都市に移る者も多くいた。ニューヨークとロンドンだけで比べると、マンハッタンのイースト・サイドがロンドンのイースト・エンドなら、マンハッタンのアップタウンはロンドンのウエスト・エンドに相当する。つまり成功したユダヤ人の住む場所だったのである。

ドイツ系ユダヤ人の数は次第に増えていき、1880年ごろには150,000人に達していた。しかしアメリカはイギリスに比べると、ユダヤ人の歴史自体の厚みがないので、ウエスト・エンドの富裕ユダヤ人のように社会の上層にまで到達するユダヤ人はまだこの時期ではほとんどいなかった。他方、押し寄せてくる移民の数は急激に増加し、ゲットーに留まったままあふれかえることになる。

イースト・サイドのユダヤ移民も、生活の様相はイースト・エンドとほとんど同じで、不衛生な住環境の中で貧窮にあえいでいた。そしてイギリスと同様の慈善団体もあった。¹⁴ しかしイギリスの場合と同様、そのような救済活動で状況が簡単に改善するわけではない。英米両国のユダヤ移民はむしろ、彼らよりも先に来ていた家族、親戚、友人などを当てにし、その伝手を頼りに生活の糧を得ようとしたのである。

アメリカの場合はユダヤ人を雇用する側のユダヤ人の数がイギリスの場合と比べるとはるかに多かった。前述のように彼らは一足先に渡米していたドイツ系ユダヤ人で、その多くは服飾業を営んでいた。ユダヤ人に服飾業が多いのは、ドイツ系もロシア・東欧系も移民する前からその関係の仕

事に従事していたからだ。ドイツの場合は服飾業といっても、そのほとんどは古着を扱っていた。ユダヤ人の扱える商品にはきびしい制限があり、古着しか扱えなかったのである。だがアメリカに渡ったドイツ系ユダヤ人は商売の幅を広げ、製造、販売にまで手を伸ばすようになっていた。

彼らは、様々なユダヤ人ネットワークを活用して、職を欲しがる新参者のユダヤ移民を雇い入れ、低賃金で長時間働かせることで利益を出した。つまり搾取していたのである。それでも、渡米したばかりの新移民にとっては、職にありつけ、当座をしのげる金が稼げるだけで有難かった。彼らは、ゲットー内のドイツ系ユダヤ人が経営する縫製工場か、あるいは工場兼住居の狭いアパート(テナメントtenement)で一日に十数時間も服を縫い続けた。そのような仕事場のことを、英語でスエットショップ(sweatshop)と呼ぶが、文字通り汗水たらして働いたのである。このような経緯から、服飾業は最も典型的なユダヤ人の職業として発展し、現在ではアメリカの服飾業界の中で大きな部分を占めるまでになった。

それ以外にもゲットー内では様々な職業や商売が発展した。例えば、ユダヤ人特有の食品(kosher)、衣料品、雑貨などは生活の必需品であったため、ゲットー内のユダヤ人の行商から買うしかなく、売る側は十分に稼業として成り立った。路上に無数に並んだカートの上では、ユダヤ人に必要なあらゆるものが売られていた。このことは、ユダヤ移民がゲットー内で生活する限り、旧来のユダヤ人の習慣をそのまま維持しながら暮らしていけたということを示している。

一方で、そのことは彼らを外部の社会から隔絶する原因にもなった。たとえば、ユダヤ教徒は安息日(Sabbath)を大事にするので、土曜日には働かない。当時のアメリカではまだ土曜は労働日であったため、ユダヤ人を他の労働者と同様に働かすことができないという不都合が生じる。それが理由で、外部社会はユダヤ移民を雇うのを嫌がった。この点は、ロンドンのイースト・エンドでもまったく同様である。イースト・エンド近くのドック内や、種々の公共事業に求人はあったが、ユダヤ人は敬遠された。求人案内に「キリスト教徒に限る」(Christian Only)という文言が付されているのは極めて普通のことであった。たとえこのように明記されていなくても、ユダヤ人らしい名前の人物は敬遠された。¹⁵

そうするとユダヤ移民は自ら事業を起こすしかない。ユダヤ人伝統の服飾関連の商売をするにも、イギリスではユダヤ人社会の規模が小さいだけでなく、経済の潜在能力が限定的であったために、アメリカのように服飾産業として急成長を遂げることは難しい。しかし、19世紀当時には、イースト・エンドの一角にあるペティコート・レイン(Petticoat Lane)の路上にユダヤ移民の営む古着屋が所狭しと並んでいた。アメリカと較べると小規模であるが、行商から身を起こして、服飾業界で成功する者もいないわけではなかった。その模様を回顧した『ニューヨーク・タイムズ』の記事にはこうある、

1901年にはイギリスの仕立て屋の60%がユダヤ人という状況の中で、親類身内でお互いつながっていたユダヤ系の仕立て業者ネットワークは、大量生産方式の半あつらえ服の販売に乗り出し、中流ないしは労働者階級向けの市場をほぼ独占した。16

服作りの腕を持ったユダヤ移民は、まずは職人として働き、やがて商売を始めるが、彼らが扱うのは伝統的な注文服の高級ブランドではなく、それまでにはなかった大衆向けではあるがオシャレな既製服であった。それを彼ら独自のユダヤ人ネットワークに乗せ大量販売したのである。あたかも大量消費社会の到来を予見していたかのように、イギリスの伝統的な服飾産業に対抗する新たな形式の業態を創出し、時代の波に乗った。

ユダヤ・ゲットーから発展した産業は、服飾産業だけではない。特にアメリカでは映画やミュージカルなどの新たなショービジネスもその源はゲットーにあった。イースト・サイドにはユダヤ人労働者の娯楽と憩いの場として、ユダヤ系劇場(ミュージック・ホール)が軒を連ねるようになり、それがやがてハリウッド映画やブロードウェイ・ミュージカルへと発展して行くのである。¹⁷

このようにロシア・東欧から英米に流入したユダヤ移民たちは、自分たちの得意分野を伸ばしていくか、あるいは新たな産業を興していくしか生きる道はなかった。それらの多くは「隙間産業」と呼ばれる未開発の分野であった。なぜなら階級社会のイギリスはもちろん、移民の国アメリカと

いえども、主要な業種はすべて建国以来の主流であり続けたWASP (White Anglo-Saxon Protestant) にすでに独占されており、新参者の彼らが入り込む余地がなかったからである。折しも19世紀後半から20世紀は産業革命後の社会・経済の転換期であり、新たなビジネスの可能性が残されていたことは、幸運であった。

4 教育 — イギリス化

ザングウィルの小説『ゲットーの子供たち』でもわかるように、ゲットー内には多くの子供が暮らしていた。小説に描かれている19世紀末はイギリスの教育改革が急速に展開していく時期であった。1870年には「フォスター教育法」(Foster's Education Act)として知られる初等教育法が施行され、イングランド、ウェールズでは公教育化が進展していく。その結果、5歳から13歳までの全ての子供が学校に通わなくてはならなくなる。もちろんユダヤ移民の子供も例外ではなかった。

1870年代はちょうど、ザングウィル自身が、学校に通っていた時期であった。彼が初等・中等教育を受けたのはイースト・エンドのスピタルフィールズ (Spitalfields) に19世紀初めに設立された「ユダヤ自由学校」(Jews Free School) であった。校名からもわかるように、ユダヤ人の子供のための学校で、富裕ユダヤ人たちが資金を提供し、初等・中等教育が行われた。衣食と医療を提供するのでゲットーの貧しい子供たちが多く学ぶヨーロッパ最大のユダヤ人学校であった。教育改革が始まると、無論この学校も国の管理下に入ることになる。

ユダヤ自由学校ではユダヤ教育だけでなくイギリス社会に溶け込むための教育すなわち「イギリス化」(Anglicize)するための基礎教育も積極的に行われた。このイギリス化教育は、ロシア・東欧からの移民が余りにも貧しく非文明的生活をしていたので、富裕なウエスト・エンドのユダヤ人が推進したものである。しかしその裏には、非ユダヤ社会がイースト・エンドの貧窮ユダヤ移民と自分たちウエスト・エンドのユダヤ人とを同一視して、かつての反ユダヤ主義が再燃し自らにその火の粉が降りかかるのではないかという危惧があった。当時は反移民的感情があっただけでなく、隣

国フランスではドレフュス事件が起こり、文明化された自由平等の社会であっても反ユダヤ感情が根強くあることを思い知らされた時期でもあった。

ともあれ、初等教育法が施行される1870年までは、ロンドンの学校教育は、国教徒、非国教徒、カトリック、ユダヤ教という宗教単位で行われていた。しかし公教育制度(state school system)の下では、国は設立資金の一部を援助する代わりに、教員人事と教育内容は国の管理下に置いた。一方、学校運営の方は、地域の教育委員会(形式上公選)に委ねられた。

とはいえ、学校ごとの宗教教育は事実上許されていたので、ユダヤ人の子供の多い学校では、「ユダヤ自由学校」のようにイギリス国民としての基礎教育と同時にユダヤ人としての宗教教育も行われていた。実際のところ、イースト・エンドでは公立校 (state schools) といえどもユダヤ人の子供が圧倒的に多かったので、教育内容は「ユダヤ自由学校」とあまり変わらなかった。

当時のイギリスが公教育を進めたのには、他のヨーロッパ先進国に対抗するための国力増強という狙いがあった。とくに、普仏戦争に勝利したドイツを念頭に置いており、イギリスの国力を上げるためにはドイツのように教育を国の管理下に置くことは必須だと考えられた。他方、アメリカのイースト・サイドの学校も、イースト・エンドと同様、そこに通う生徒たちはほとんどがユダヤ人であった。ユダヤ人の割合は、英米どちらの場合も90%をはるかに上回った。18 しかし、次の2点で両者は異なっていた。

まずは、ロンドンでは1902年までは、極貧の場合を除いてほぼ全部の家庭が授業料を払っていたのに対して、ニューヨークでは公立であれば完全に無料であった。次に、ロンドンではユダヤ教の教育も可能であったが、ニューヨークでは、少なくとも1900年まではどの公立校でも新約聖書を読まされ、キリスト教の聖歌を歌わせられた(政教分離の原則のもと宗教教育に対して当局は中立であるとされていたが、州や時期によって変化する)。そしてキリスト教以外の宗教教育は許されていなかった。したがって、ユダヤ人の子供は放課後にヘブライ語学校(Hebrew School)に通いユダヤ教の教育を受ける必要があった。

更に具体的には、イースト・エンドではユダヤ教の祭日は学校を休みに し、しかも金曜の日没から始まる安息日(Sabbath)は、授業を早く終了し

て、生徒たちが儀式の準備に参加できるように配慮した。もちろん試験など重要な学校行事は実施されなかった。ところがイースト・サイドでは、ユダヤ教の祭日も安息日も平常通り授業を行った。こうしてみると、宗派別の学校教育の伝統のあるイギリスの方が、ユダヤ教に対してはより寛容であったといえる。¹⁹

公教育の充実は、当時の英米両国にとって最重要課題であった。とりわけ国力が相対的に低下し、資本主義経済のリーダーとしての地位が脅かされていると自覚しているイギリスにとっては最重要課題の一つであった。イギリス教育史に詳しいスティーヴン・ハンフリーズによると、「公教育制度は、諸価値と諸作法を身に付けさせるための最強の手段であり、そしてそれは産業資本家社会を再活性化するために不可欠の要素であると考えられていた」という。²⁰

公教育は13歳つまり義務教育までで、それより上級の学校へ進学しようとしても貧しい移民の子供にとっては極めて困難であった。奨学金のための公的資金が潤沢ではないのでその額は少なく、たとえ難関を突破して奨学金が得られたとしても、それは食べ物や古着を買うのに消えてしまい、勉学を継続することは難しかった。

ニューヨークでは公立の高校教育は無料であったが、学校へ行くよりは、 貧しいユダヤ移民の子供は働かないと家族が暮らしていけないので、1902 年の統計では入学資格のある者のうちわずかに2%しか進学しなかった。 義務教育を終えるとほとんどの子供が働きに出たのである。たとえ高校に 入ったとしても、途中で止めざるを得ず、わずか11%しか卒業しなかった。²¹

高等教育になると、さらに困難な状況になる。イギリスでは、オックスフォードやケンブリッジに入学するのに奨学金が得られたとしてもその確率は千人に1人であったので、よほど抜きんでた秀才でない限り無理であった。それに引き換え、ロンドン大学はより緩やかだったので、貧しいユダヤ人子弟でも、1890年代に14人、1920年代には66人が入学している。22

アメリカの場合は、ニューヨークのニューヨーク市立大学とハンター大学の2校が授業料無料であったため、経済的余裕のない移民家庭出身者でも大学へ進学できた。とりわけニューヨーク市立大学は、20世紀に入る

とユダヤ系子弟の学生が目立つようになり、1930年代にはその数は全学生の78%に達した。その結果、アメリカではゲットー育ちのユダヤ人が知識人として、戦中から戦後にかけて活躍するようになり、その数と勢いはWASPをはじめとする他の民族出身者をはるかに凌駕した。²³

他方、イギリスでは、ゲットー出身の知識人となるとその数は極めて少なく、イズラエル・ザングウィルは例外的存在であった。 24 無論、ディズレーリの例で分かるように、裕福なユダヤ人家庭に育った知識人は過去にも例がある。また戦後のイギリスで活躍するようになるユダヤ系知識人は、I・バーリン、G・スタイナー、E・ホブズボームなど外国生まれの亡命者であった。 25

ザングウィルは、ラトヴィア出身の父とポーランド出身(当時は両方ともロシア帝国内)の母の間に、1864年にロンドンで生まれた。プリマスやブリストルにしばらくいた後、イースト・エンドに移り、前述のように「自由ユダヤ人学校」で学ぶが、成績が極めて優秀であったため在校中から教えるようになる。卒業後は勉学を継続するため、教えながら、つまり苦学してロンドン大学に通った。卒業時には複数の部門で優秀賞を獲得した。その後はジャーナリスト兼作家として活躍するようになる。

5 シオニズムとナショナリズム

ザングウィルが19世紀後半をイースト・エンドのユダヤ移民社会で過ごしたということには意義深いものがある。ゲットーの中で日常的に耳にするイディッシュ語、非イギリス的な生活様式、宗教、そして貧困はザングウィルの民族的アイデンティ示すものとしてその後も彼の中で生き続けた。しかしその一方で、勉学を通じて、あるいはゲットーの外で出会う非ユダヤ的な文化、すなわち標準英語、マナー、プロテスタンティズム、豊かで清潔な暮らしは、自分がそこに属していないという疎外感を抱かせる。

彼が高等教育を望んだのは、その疎外感を拭い去るためでもあった。近 代市民社会に解放されたユダヤ人は、生き抜くために自分たちを取り囲む 社会と文化に適応しようと努力する。時には、ドイツのハイネやマルクス のように、ユダヤ人の民族的同一性の証であるユダヤ教を捨てることさえ

ある。彼らは自分を取り囲む社会に受容されひとかどの人物になるために、 勉学に励み普遍的な価値を得ようと懸命になる。²⁶ しかし、ゲットーのユ ダヤ人たちは余りにも貧しすぎた。ザングウィルがシオニズムに出会うの は、そのような状況においてであった。

ザングウィルがテオドール・ヘルツルに初めて会ったのは1895年のことである。²⁷ シオニズムの唱道者として知られるヘルツルは、当時のオーストリア=ハンガリー帝国のブダペスト出身で、ザングウィルと同じく1864年生まれであった。ロンドンで出会った二人はすぐに意気投合し、ヘルツルの亡くなる1904年まで志を同じくして一緒に活動した。しかし、同じユダヤ人でありながら、イギリスに生まれロンドン大学で教育を受けたザングウィルと、オーストリア=ハンガリー帝国に生まれ、ウィーン大学を卒業したヘルツルとの間には、発想において微妙な違いが見られた。ザングウィルが現実主義的であるなら、ヘルツルは理想主義的であったといえる。この違いは、彼らがそれぞれ暮らしていた19世紀末のイギリスとヨーロッパ大陸の状況の違いを反映するものかもしれない。

19世紀半ばには、ギリシアをはじめとする諸民族の独立、七月革命、三月革命などによってウィーン体制が揺らぎ始め、ナショナリズムが各地に興隆し始める。ナショナリズムはやがて分断された民族の統合を目指すようになり、その最も顕著な結果が70年代のイタリアとドイツの相次ぐ統一である。それは産業化の進展に伴う市場統一という側面も含んでおり、それぞれが資本主義を経済の基盤に据えた近代国家として、また同一の民族によって国民が形成される国民国家(nation-state)としての道を歩み始める。

ヨーロッパ各地に在住していたユダヤ人たちは、このようなナショナリズムの機運と無関係ではいられなかった。そもそもロシア帝国領内で起こったポグロムは、前述のようにロシア皇帝暗殺の容疑者の中にユダヤ人女性が含まれていたということが引き金となったものであった。そこには明らかにロシア・ナショナリズム的要素が見て取れる。実際、「黒百人組」と称する愛国主義的な極右団体が暗躍し、多くのユダヤ人がテロの犠牲になった(この「黒百人組」はナチスに引き継がれる)。ユダヤ人がかくも容易に攻撃の対象になるのは、彼らがいつどこにあっても常に〈内〉なる〈外〉と

いう存在であり続け、アヴィエル・ロシュウォルドが言うように、「民族 的少数者はしばしばナショナリズムの憤懣とフラストレーションの安全な はけ口になりうる」²⁸からである。

ヨーロッパで最も早くユダヤ人の解放を行ったフランスでも、1894年にはドレフュス事件が起こった。世界のユダヤ人たちは、先進地域のフランスの中にさえ反ユダヤ的感情が根強いことを思い知ることとなる。さらには、1890年代から1900年代にかけて、『シオンの議定書』がロシア語から各国語に翻訳され、ユダヤ人が世界征服の陰謀を企てているという風聞が瞬く間に広まった。²⁹

シオニズムは、ヨーロッパ各地で沸き起こるナショナリズムとそれに由来する反ユダヤ主義の圧迫に対抗して、自分たちの民族のための国家すなわちユダヤ人の国民国家を建設しようとする運動であり、その意味ではナショナリズムの亜種と見なすこともできよう。他方、イギリスでは、民族の理想を重視するというよりは、市民社会の延長上にある国家の存亡のためのナショナリズムという性格が強く、ドイツなどで起こっているそれとは異なる性質を持つ。そもそもイギリス人という国民が複合民族の集団であることの自覚が強いため、一つの民族に収斂されるような理想主義的発想、例えば民族の純粋化といった志向につながりにくい。30

したがって、イギリスでは、ヨーロッパ大陸におけるような感情的な反 ユダヤ主義が目立つことは余りなかった。むしろユダヤ移民に対する反感 ないしは嫌悪感はすでにイギリス社会に参入し終えた富裕ユダヤ人からのもので、貧しくて汚いユダヤ移民と自分たちが同一視されることを恐れた 結果であった。前述のように彼らの移民救済事業はそれに端を発する。またイギリス人にとっては、ゲットーの住民がユダヤ人であろうが、他の民族であろうが、社会の負担にならなければ、それでよかった。極端なことを言えば、ユダヤ人が土曜にも働いてくれれば仕事を与えてもよかったのである。イギリス社会にとって有用であるか否かが問題だったのである。31

シオニズムの展開についてもイギリスでは現実主義的な側面が目立った。 まずは、ユダヤ移民にとっては、イギリスへ渡ってきたばかりであり、日々 の暮らしのことで頭がいっぱいでシオニズムどころではなかった。また富 裕ユダヤ人にとっては、ユダヤ移民を他の地域に移して健全なユダヤ人社

会を築ければ、イギリス国内の貧窮ユダヤ移民問題を一気に解決できるし、加えて、シオニズムが救世思想としてゲットーの住民たちに受け入れられ、富裕層の心配する社会主義の台頭を防ぐという思惑もあった。³²

このような理由からナサニエル・ロスチャイルドやアルバート・エドワード・ゴールドスミド他の富裕ユダヤ人はヘルツルの提案に熱心に耳を傾けたのである。その一方で、サミュエル・モタギュやクロード・ゴールドスミド・モンテフィオーレなどは、自分たちが確立したイギリス市民としての地位を脅かすとして、民族主義的な色彩の濃いシオニズムそのものに大反対であった。³³

またイギリス政府にとっては、シオニズム支援は、パレスチナひいては 中東地域における自国の存在感を増すことにつながるので、この機運を利 用しない手はなかった。さらには、ゲットーに流れ込んでくるユダヤ移民 を食い止めるのに最良の策であることも認識していた。当然この目論見は、 富裕ユダヤ層のシオニズム支持者が共有するものでもある。

そもそもパレスチナの地にユダヤ人の国家を建設しようというシオニズムの理想は、ヨーロッパ大陸のヘルツルらのユダヤ知識人たちの観念の中で育まれたものである。西欧におけるユダヤ人の解放が結局は失敗であったという認識が背後にはあった。³⁴ はじめはザングウィルもヘルツルのシオニズムに同調していたが、実際にパレスチナを訪れ、現地の様子を知ると、その理想の実現が困難なものであることが分かった。なぜならパレスチナにはすでにアラブ人たちが1000年以上ものあいだ住み続けており、彼らを押しのけてユダヤ人国家を作ることは、いたずらに混乱を生み出すのみであると判断したからである。今のパレスチナの状況を思えば、見事な洞察であった。ヘルツルが死去した翌年の1905年にザングウィルはパレスチナ移住計画案から離れ、アフリカ東部のウガンダの未開の地にユダヤ人国家を建設すべきであると考えるようになる。

さて、そのころに書かれたザングウィルのもう一つの作品に『坩堝』The Melting Potがある。これは1908年から1909年にかけてブロードウェーで大ヒットした芝居で、そのタイトルから「人種の坩堝」という表現が生まれ流布したということはよく知られている。芝居の内容は、『ゲットーの子供たち』と同様、ロシアからのユダヤ移民の物語だが、舞台はニューヨー

クである。テーマは多民族・多人種の融合であり、移民が大量に押し寄せてきている当時のアメリカ社会の統合を、自らの政治課題としていたセオドア・ルーズベルト大統領が絶賛したことでも評判となった。35

イースト・エンドで生まれ育ったザングウィルは、ユダヤ移民の置かれた現実を先入観や理念にとらわれることなく、具体的にそして冷静に捉えていた。その彼がシオニズムという一種のユダヤ・ナショナリズムに出会ったとき、一時はその理想に惹かれたかもしれないが、すぐにその危うさを察知した。そもそもどの国民国家にあっても、ユダヤ人は法的にはその国家の構成員(国民)であるといえるが、民族的そして宗教的には少数者でしかありえず、本来的にナショナリズムにはなじまない存在である。だからこそユダヤ人は自分たちの周囲の民族と共生するしか自らの存続を願うことはできない。パレスチナにユダヤ人国家を建設しようとすれば、新たな追害を生むだけである。これらのことをザングウィルは深く認識していたはずである。

イースト・エンドとイースト・サイドのユダヤ人たちの歴史を振り返って浮かび上がってくるのは、近代的な国家観に内包する根本問題、すなわち国民国家 (nation-state) における民族的宗教的少数者 (ethno-religious minorities) のアポリアであり、ひいては現在の拡大する多文化的状況における諸問題である。

注

- 1 ポグロムは、最初の波が1881年からの4年間ウクライナと南ロシアで起こり、 第2の波が1903年からの6年間で、日露戦争と「血の日曜日事件」(第1革命) による政治的動揺を背景に、第3の波は1917年からの4年間で、第一次大戦 とロシア革命の混乱期にロシア全土に広がった。
- 2 度会好一、『ユダヤ人とイギリス帝国』(岩波書店、2007年)、142頁。
- 3 Selma Berrol, East Side/East End; Eastern European Jews in London and New York, 1870–1920 (Westport, CT: Praeger, 1994), 25.
- 4 Todd M. Endelman, *The Jews of Britain*, 1650–2000 (London: University of California P., 2002) 71–75.
- 5 Endelman, 75-76.
- 6 Berrol, 6-7.

7 Israel Zangwill, *Children of the Ghetto: A Study of a Peculiar People* (London: Aegypan, 2008), 22–23.

- 8 Berrol, 36.
- 9 Zangwill, 8.
- 10 Berrol, 29.
- 11 19世紀末に国会議員になったユダヤ人に、サムエル・モンタギュ (Samuel Montagu)、ベンジャミン・L・コーエン (Benjamin L. Cohen)、アルバート・E・ゴールドスミド (Albert E. Goldsmid)、クロード・G・モンテフィオーレ (Claude Simon Montefiore) などがいた。
- 12 Endelman, 88.
- 13 ザングウィルは別の作品『乞食の王様』 The King of Schnorrers (1894) ではさらに辛辣な風刺を行っている。
- 14 そのような団体の一つに、1874年創立のUnited Hebrew Charities があった。
- 15 Berrol, 31.
- 16 "Dressing the Man: A Century of Jewish Tailoring in London," *New York Times*, June 9, 2016, D10 of the New York edition.
- 17 この事情については、拙著『ユダヤ人と大衆文化』(ゆまに書房、2014年)に 詳しく書いた。
- 18 Berrol, 55.
- 19 Berrol, 53-54.
- 20 Stephen Humphries, *Hooligans or Rebels?*: An Oral History of Working-Class Childhood and Youth 1889–1939 (Oxford: Basil Blackwell, 1981) 31.
- 21 Berrol, 99-100.
- 22 Berrol, 103-104.
- 23 『ユダヤ人と大衆文化』、182頁。
- 24 イースト・エンド出身で高等教育を受けた数少ない人物の中に、ルーファス・アイザックス (Rufus Issacs, 1860-1935) がいる。彼はロンドンにある4つの法曹院(法律学校を兼ねる)の一つミドル・テンプル (Middle Temple)を卒業した後、法曹界と政界で活躍し、司法長官、外務大臣などを歴任し、最後にはレディング侯爵にまで上り詰めた。しかしその彼も、もとはスピタルフィールズの貧しい果物商の息子で、14歳で学校をやめると、家業の手伝い、客船のボーイなど職を変えながら勉学の道を進んだ。
- 25 Endelman, 263.
- 26 Jean-Paul Sartre, *Reflexions sur la Question Juive* (Paris: Gallimard, 1954; first published, 1946) 118.
- 27 Geoffrey Alderman, Modern British Jewry (New York: Oxford UP. 1992) 221.
- 28 Aviel Roshwald, "Jewish Identity and the Paradox of Nationalism," Michael

- Berkovitz ed., Nationalism, Zionism and Ethnic Mobilization of the Jews in 1900 and beyond (Leiden: Brill, 2004) 19.
- 29 ヨーロッパだけに留まらずアメリカでもヘンリー・フォードが自分の運営する週刊新聞(Dearborn Independent)で『シオンの議定書』(The Protocols of the Elders of Zion)を取り上げ、自らの反ユダヤ主義のキャンペーンに活用した。無論、この議定書がのちにヒトラーの反ユダヤ主義にも利用され、ホロコーストにまでつながったことは言うまでもない。
- 30 社会学や歴史学ではしばしば、このような違いを、前者を「エスニック・ナショナリズム」(ethnic nationalism)、後者を「シヴィック・ナショナリズム」(civic nationalism)という用語で区別している。前者に含まれるのが、ドイツ、東欧、バルカン諸国、後者に含まれるのが、アメリカ、イギリス、フランスなどである。参照、Liah Greenfeld, Nationalism: Five Roads to Modernity (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1992; Rogers Brubaker, Citizenship and Nationhood in France and Germany (Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1992). さらに、イギリスの歴史学者 Gary Gerstle は、前者の特質を Volk というドイツ語を用いて説明しており、その意味するところは、"a people who share the same blood, history, language, and land"としている。Gary Gerstle, American Crucible; Race and Nation in the Twentieth Century, (Princeton, NJ: Princeton University Press, 2001) 44.
- 31 イギリスの政界には、現実主義者だけでなく、ジョゼフ・チェンバレン(当時の植民地相)のような感情的な反ユダヤ主義者もいた。彼はイタリア外相ソニーノの面前でこう述べた――「軽蔑している民族が一つだけある。それはユダヤ人ですな。彼らは生まれついての腰抜けだ」、度会、154頁。
- 32 Endelman, 188-189.
- 33 Alderman, 245; Endelman, 191.
- 34 Alderman, 221.
- 35 この芝居の主人公は次のように高らかに歌い上げる、"America is God's Crucible, the great Melting-Pot where all the races of Europe are melting and reforming... Germans and Frenchmen, Irishmen and Englishmen, Jews and Russians into the Crucible with you all! God is making the American," Gary Gerstle, 51.

——日本大学教授

Summary

East End and East Side: The World of Jewish Immigrants

Kunishige Hori

More than two million Jews left the Russian Empire between the late 1870s and the early 1920s. Approximately 1.5 million went to the United States and 120,000 settled in the United Kingdom. Most of the former's new homes were East Side in New York (formally, Lower East Side); most of the latter, East End in London. Incidentally the sounds of the two names being very similar, both of which soon became known as "Ghetto." The Jewish immigrants who had escaped from poverty and persecution were not necessarily welcomed in either city. Each of the ghettos seemed to the outsiders as "another world," because of its abject poverty, filthiness and nasty smell as well as their strange language (Yiddish) and lifestyles (Orthodox). In order to overcome the obstacles and discrimination stemming from the peculiarities, the settlers in ghettos had to study hard, work hard and endure. Above all else, they had just to survive.

This paper deals with the Jewish situation in the Victorian era from various points of view: a history of immigration, poverty and wealth within the Jewry, occupations, and education. I will treat the problems concerning Zionism and nationalism in the final section. Zionism and nationalism are apparently similar but fundamentally contradictory to each other, because the former is an ideology for the people without their own land, while the latter is an ideology for the people who live in their own land. Therefore, when Zionism is realized in Palestine, it inevitably leads to a conflict, as we see today, between the settlers and the natives. In this respect the notion of 'nation-state' should be reconsidered and we need to examine its validity for the age of coexistence.